

人形をめぐる人々

水谷年恵子

「お別れ」

園長さんと子供達とのお別れの日が来ました。永い間、園長さんの可愛い子になつてゐた子供達が、もう今日限り、園長さんの両手の中から、すつぽりと離れて方々の小學校へ連れて行かれてしまふのです。

子供達がお免状を頂く時、園長さんは、どの位嬉しいかわからないお顔で、子供達を一人一人、「えらい」、「えらい。」とお褒めになりました。子供達が喜んで、

園長さん　ありがたう！　ありがたう！

と口々にお禮を言つて、皆で園長さんを取擁しました。するとこゝろ顔の園長さんの目から、ぼたり、ぼたりと涙が落ちて、笑つたまんま、園長さんは、

あーん、く。あーん、あん、あん、あん。

と泣出されました。子供達は園長さんの泣くのを見て、吃驚しました。園長さんは今まで一遍もお泣きになつた事なんか無かつたのですもの。

子供達は目をぱちくりさせて、園長さんのお顔を見上げて居ました。園長さんは両手を目にあて、其處へおしやがみになりました。一人の子供が、心配さうな顔付をして園長さんの背中をさすつて上げました。又一人の子供が小さい手で園長さんの濡れた頬を撫でて上げました。園長さんは、

えへ、えへ、へ、へ、へ。

と泣笑ひをして、立上つて両手を目からお離しになりました。園長さんのお顔は、雨上りのお天たう様の、ぴか／＼光るお顔でした。子供達が、わあ！つと囀立てると、園長さんは、

芽出度い、芽出度い。

と言つて、子供達の頭を、一人一人丁寧に撫でになりました。

「記念」

何處から運んで来たのか、子供達はそれは／＼大きなお人形を、一人では抱いて歩けないので何人もかゝつて、そして大勢でぞろ／＼と、園長さんの前へ連れて来ました。

黒い髪の毛のふさ／＼した、お振袖のお人形で、誰でも一目見たら、きつと、

まあ！可愛らしいわね！

と褒めずには居られないお人形でした。子供達の後の方に目を細くして喜んでゐた幼稚園の婆やが、

「園長様、お子さん達が此のお人形を園長様にお上げなさるさうでございますよ。」

と申しました。園長さんはびつくりして、

「ひえ！此のお人形を？みなさんが？わたくしに！

下さいますつて？」

子供達が一齊に、

「さうです！さうです！」

と答へると、

「まあ、有がたう、有がたう、有がたう、有がたう。」

「可愛いわね！嬉しいわね！有難いわね！」

何處も／＼園長さんは同じ事を仰有つて、お人形を、目も口も融けてしまふ笑顔で眺めて、

「おほ、おほ、おほ……」

とお喜びになりました。

子供達は皆でばち／＼手をたゝいて、

園長さんはママさんだ、

園長さんは母さまだ、

園長さんは嬉しいな、

赤ちゃん産れてうれしいな、

と囃立てました。

園長さんは、お人形を大じさうにかゝへて、子守唄のや

うなのお歌ひになりました。

この子いとし子、

巢立ちのかたみ、

皆のたましい、

この子にこもる。

この子いとし子、

わたしの寶。

「よろこび」

記念のお人形を迎へて、園長さんのおうちがばつとあかるくなりました。そして賑かになりました。それから花が匂ふやうに氣持が好くなりました。園長さんのお顔も皺が伸びて若々しくなりました。眉も額も晴々となりました。

お人形を抱いた園長さんを載せて、そろり／＼と挽いて來た俵やは、いつもより澤山おあしを戴いて、

「御馳走様で御座いました。お人形さんをおだいに。」

と言つて歸つて行きました。お人形を入れて置く大きな箱も有るので、座敷まで運入れるのに、お隣のお婆さんまで來てお手傳をなさいました。

お人形を立たせる臺の上に立たせて、座敷の眞中のテーブルの上に据ゑると、又園長さんのお顔は笑みこぼれまし

たお隣のお婆さんは、あまりお人形が可愛らしいので、物が言へず、笑つたのか、泣いたのかわからないやうなお顔で眺めていらつしやいました。

お隣から園長さんのお仲好の坊ちゃんも飛んで來ました。その叔母さんも、お母さんも見にいらつしやいました。遠い田舎からお隣へ來ていらつしやるお客様のご老人までが見物にいらつしやいました。

「まるで生きてゐるやうね。」

「今にも何か口をきゝさうぢやありませんか。」

「あら／＼、睫毛がありますよ。」

「可愛いお手々、爪もあるわ、爪に紅さしてゐますのね。」

「あつ足袋穿いてる。懐から簪のびら／＼が下つてるよ。」

「それハコセコマて言ふのよ、緋鹿の子のしよい揚に白紐の帯しめで、大へんなお仕度ね。」

「不可思議」

此の人形は誰が作ったのだらう、此の眉を描き、此の眼

を開かせ、此の鼻を作つて、唇をそつとつばませたのは誰だらう。

咲匂ふ花の袂を重ね着させて、紅い錦の帯締めさせたのは誰なのだらう。

園長さんの心の中には、もう毎日毎晩、お人形を思ふ思ひが泉のやうに湧いてゐます。

來りて見よ、

此處に不可思議あり。

泣く者は笑ひ、

憤る者は和らぐむ。

いさかふ者は相倚りて手を握り、

惡みあふ者は惡しみの心を棄てむ。

痛みは去り、

苦しみはやがて癒えむ。

悲哀の谷の百合、

死の蔭の火影。

來りて見よ、

此處に不可思議あり。

園長さんは、今此のやうに呼掛けて、男にも女にも子供にも年寄にも、此の人形が見て貰ひたいのでせう。訪ねて來る程の人が、どんなに多忙な人であつても、園長さんは「一寸、一分間でもいいから、是非、人形を見てやつて下さいな。」

と勧めずにはおかれません。すると、どの人もどの人も、皆申合せたやうに、急にこゝろして、

「へえ、お人形、では一寸。」

と上り込んで、園長さんの「不可思議」を見せておもらひになります。

「をしへー」

土で作つた人形でさへ、

その人形を廻る慶びは大きいものだ。

血をわけ、肉をわけて産んだ我が子、

造物主の靈を宿して産れた我が子、

子を持つた慶びはどのやうにあらうぞ。

その慶びは天にも満ち。

地にも漲るであらう。

潮も慶びの聲を揚げ、

山々も慶びに揺れ、

日も月もその慶びに輝くであらう。

土で作つた人形の

尊いをしへ、

「人の子ををしへる者よ、」

その慶びを知れ。

と。

だあれも居ない時、お人形の前で、

ああ！ あ！

と、感歎の聲を放つた園長さんの眼には美しい涙が一ぱい光つてゐました。

お茶の水人形座俳優諸氏がこの度彌生狂言「七匹の
小山羊」上演に際して座元兼舞臺監督倉橋惣三右衛門
氏より愈々その技熟せりとて名題にしていたゞきまし
た左に御披露に及びます

お目見得

初代 ふじろ助 こと 菊池ふじの

も可吉 こと 徳久 孝子

はゆめ こと 村上 露子

幸の八 こと 小島 その

以上